

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 25 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22560638

研究課題名(和文) 方丈建築の空間構成に関する研究

研究課題名(英文) Study on space constitution of HOJO-type architecture

研究代表者

光井 渉 (MITSUI, Wataru)

東京藝術大学・美術学部・准教授

研究者番号：40291819

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の中世から近世にかけて、住宅や寺院本堂など様々な用途で用いられた「方丈」建築の空間構成を解明しようとしたものである。方丈建築は6室から構成される単純な形式であるが、壁面の素材及びデザインを変化させることで、その6室は相互に連続ないしは遮断され、結果として豊富なバリエーションを有する。本研究は、6室の空間的な連続性に着目してその空間構成の種別を把握すると同時に、建築規模等の数値的な分析と室内意匠の関係性を考察することで、方丈建築の歴史的な変遷過程を明らかにするために実施したものである。

研究成果の概要(英文)：This study examined "HOJO-type architecture". With the thing which HOJO-type ran in the early modern times from the Middle Ages in Japan, and was used by various uses including a house and the temple main hall of temple. HOJO-type consists of six rooms; is simple, but, by the material of the wall surface and a design, the whole constitution has an abundant variation. This study identified the HOJO-type variation by the investigation into the buildings which are important cultural properties.

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：建築史 日本建築史 方丈 欄間

1. 研究開始当初の背景

方丈建築は、中世に禅宗寺院における住宅建築として生まれ、近世以降に住宅兼用の仏堂として宗派を問わず普及したものである。その平面形はほぼ左右対称の6室構成を基本とし、各室に畳を敷き詰めているものであり、この特徴を完備する龍吟庵方丈(1387年)は現存する最古の住宅建築の遺構と考えられている。

この方丈建築については、これまで以下の三つの観点から研究がなされてきた。まず第一は、禅宗建築研究の視点にたった横山秀哉などの研究で、塔頭を含めた禅宗伽藍を形成する建築としての検討が行われている。これは遺構の所在状況やその性格を明らかにしたもので、その後の研究の出発点となっている。次いで第二は住宅史研究の観点から行われたもので、川上貢や稲垣栄三らによって、中世に現れた「会所」の系統に連なるものとして評価が行われた。また、書院造的要素を備える方丈建築の遺構は、藤岡通夫・平井聖らによって、書院造成立期の解明にテキストとして用いられた。最後の第三は、昭和50年代以降に進展した近世社寺建築研究の観点からのもので、これにより方丈形式を採用する寺院本堂が数多く確認され、その宗派的特徴と平面分類が進展した。こうした研究によって、方丈建築は中世に寺院内の住宅として発生し、桃山期以降に書院造と仏堂の要素を吸収したものとみなされるようになった。

ここで住宅系建築遺構の建築年代を確認すると、古代の住宅建築である寝殿造や中世の会所は、慈照寺東求堂(1485年)を唯一の例外として遺構が残っていないが、方丈建築の遺構は、14世紀末の龍吟庵方丈まで遡り、15～16世紀のものも8棟存在し、17世紀以降は様々な展開をみせながら広く日本中に存在し、重要文化財指定物件のみで49棟の遺構が存在している。

こうした研究状況から、方丈建築は寝殿造と書院造の間に挟まれた住宅史のミッシングリンクである中世住宅の様相を解明する重要な位置を占めるといえよう。同時に、住宅と寺院本堂という2つの建築類型の間に位置する重要な文化史的意味も持っている。しかしながら、これまでの先行研究は、いずれも平面形に基づいて行われ、建築物としての空間構成や様式的特徴には十分に踏み込んでいない。

2. 研究の目的

以上のような研究動向を前提として、本研究では、中世に出現し近世に数多く建設された方丈建築の空間構成と様式的特徴を、重要文化財に指定されている建築遺構の実地調査を通じて明らかにしようとしている。

ここで、本研究で空間構成を検討する上で特に重要視するのは、方丈建築を構成する6室の連続性である。方丈建築は正面側と背面

側にそれぞれ3室を配置して計6室とし、さらに室の境界に原則として食い違いを持たない単純な形式である。しかしながら室の境界の内法装置(壁・建具)や内法上装置(小壁・欄間)の種別によって、隣接する室を連続ないしは遮断あるいはその中間的な状態とすることで、その6室は多様な繋がりをみせることになる。本研究では、この室の繋がり方を空間構成と称しており、そのパリエーションを明らかにしていく。

続いて様式的研究では、6室という類似した平面形式を持ちながらも、その平面的・断面的規模が大きく相違する方丈建築において、意匠の選択がどのように行われているかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

以上のような研究目的を達成するために、本研究では、重要文化財に指定された17世紀以前の方丈建築遺構を対象としている。重要文化財に限定した理由は、全般的傾向を明らかにするための十分な遺構が存在していることに加え、その6割については精密な文化財的調査がなされて、復元的な考察が可能な状況となっていることに基づいている。17世紀以前に限定した要因は、この時期までに大型の方丈建築建設が終了して建築形式が完成していること、柱間寸法の決定手法が柱心々や垂木配置に基づいた支割から畳寸法に依る畳割に移行していることに基づいている。

本研究にあたっては、限定した49棟の方丈建築に関して、刊行された修理工事報告書等のデータに加え、43棟について遺構調査を実施し、下記の情報を集約した。

- 全体規模数値(正面・奥行・面積)
- 6室部分規模数値(正面・奥行・面積)
- 正面側中央室規模数値(正面・奥行・面積・天井高・内法高)
- 柱の断面寸法(径・面内・比例)
- 内法上装置(小壁・各種欄間)
- 天井意匠(竿縁・格・鏡など)
- 障壁画の画題及び色彩

これらの情報から、方丈建築に室内を構成する6室の連続性を判断してパリエーションを求め、さらに数値的な情報と意匠的な情報の関連性や様式的特徴を検討した。

4. 研究成果

まず方丈建築の空間構成に関しては、隣接する室の連続性を室境界の内法上装置の種別に基づいて判断した。すなわち、内法上が開放される落掛や鴨居あるいは竹の節欄間によって接続している場合(完全接続)、一定の繋がりを指摘できる箴欄間や板欄間等によって連続している場合(不完全接続)、小壁によって完全に遮断している場合という指標に基づいて、隣接する2室の連続性を分類した。

この結果、方丈建築の空間構成には以下の

ようなタイプが存在していることを確認できた。

6室に空間的な連続性が存在しないタイプ(2例)

正面側3室に空間的な連続性が存在するタイプ(14例)

正面側3室に加え、中央部2室にも空間的な連続性が存在するタイプ(10例)

正面側3室に加え、片側の側面部2室にも空間的な連続性が存在するタイプ(7例)

正面側3室に加え、側面部両側それぞれ2室にも空間的な連続性が存在するタイプ(3例)

正面側3室に加え、中央部2室及び側面部両側それぞれ2室にも空間的な連続性が存在するタイプ(1例)

奥行方向に並ぶ2室に空間的な連続性が存在するタイプ(4例)

ここでそれぞれの遺構の用途を確認すると、のタイプは仏教儀礼に対応する寺院本堂としての用途に特化したもの、あるいは完全に住宅としての機能のみを有するものである。次いで のタイプは禅宗の塔頭本堂が大部分を占めると同時に16世紀以前に遡る古い時代の遺構である点に特徴があり、住宅的な色彩が強いものである。も同じく禅宗の塔頭寺院本堂に加えその他宗派の本堂にも見られる形式で、中央奥に設けられる仏壇と対応した宗教空間としての機能が よりも重視されているものである。及びは、禅宗の塔頭には存在しない形式で、側面部に設けられた座敷飾りを持つ室からの書院造的展開が顕著な事例である。は及びの複合形態である。も禅宗以外の宗派にのみ見られるもので、6室構成を採用してはいるが、仏壇とその前室・書院造的な室の連続が結合したタイプである。

以上のように、方丈形式を採用する建築遺構には顕著な空間構成上の種別が存在し、かつその種別が宗派・用途・建設時期と密接な関係を有することが確認できた。

建築の様式的な考察においては、以下のような特徴を抽出した。

まず、6室部分の面積については最小89㎡から最大419㎡に分布しているが、過半にあたる26例が130~190㎡の間に該当しており、方丈建築の標準的な規模とみなすことができる。さらに6室部分の正面：奥行の比率は、全体規模の大小によらず3：2の比率となっていることが確認できた。この比率は建築の向きに関係ないので、日照条件によるものではない。

次いで、室中と称される場合の多く、方丈建築において最も重要な意味を持つ正面側中央室に関しては、面積は16~116㎡の間に分布し、30~60㎡の間が卓越している(33例)。断面方向については、面積の大小にかかわらず内法高は1.8~2.1mと一定であるが、天井高については2.54~5.44mと散らば

りを見せている。この天井高に関しては正面側中央室の面積が20~60㎡の場合には、面積と緩やかな相関関係があり、おおむね $2 + (\text{正面側中央室面積} - 20) \times 0.05$ の式で表現される数値の $\pm 0.5\text{m}$ の範囲に納まるが、60㎡を越えると相関関係は見られない。また天井高と正面側中央室の正面規模・奥行規模との相関関係も指摘できない。

このように方丈建築にあっては、内法寸法がほぼ一定であり、かつ天井高が広い範囲に分布するために内法上の高さは0.65~3.95mの間に広く分布している。ここで内法上の高さと同様に内法上装置の意匠の関係性を確認すると、内法上高が1.6m以下では単純な小壁ないしは小壁に蟻壁を付したものとなっているのに対して、1.6mを越えると小壁を2段とするものが主流となる。なお、天井高た内法上高と天井の意匠選択に関しては顕著な相関関係はみられず、天井高が4mを越えると竿縁天井が少なくなり格天井が主流となるといった現象が確認できるのみである。

次いで建築計画の際に用いられる柱配置の手法については、1557年の瑞峯院本堂以前の6例は全て柱心々間の距離が基準となっている(基準寸法6.8尺ないし6.5尺)。この直後にあたる聚光院本堂(1583)から柱の内法を畳寸法と合致させる畳割が出現しており、京都における6.3尺の畳の普及を予想できる。しかし、この後も17世紀中期まで柱心々間の距離を用いるものと、柱内法を畳割とするものは混在しており、完全な畳割の普及は17世紀には実現していないと判断できる。

最後に、建築年代指標として用いられることの多い柱の面取り寸法については、柱径/((柱径-柱内面)/2)の数値を求めると、16世紀以前の遺構はおおむね11以下となり、その後元和期が終了する1624年頃までは13以下で推移するが、寛永期に入ると数値は広い幅で上下している。したがって、柱の面は元和期以前の遺構について編年指標となることが確認できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

大井隆弘・光井渉、吉田五十八の住宅作品を通してみる中上流住宅の起居様式、日本建築学会計画系論文報告集、日本建築学会、査読有、Vol.79、No697、2014、pp.807-814

光井渉、桂離宮 近世宮廷建築の美意識、日本美術全集 江戸時代、小学館、査読無、2013、pp.208-213

光井渉、書評『真宗本廟(東本願寺)造営史』、建築史学、建築史学会、査読有、2013、pp.147-160

光井渉、都市と寺社、浅草寺仏教文化講座、金亀山浅草寺、査読無、2012、pp.76-103

野村正晴・光井渉、丸ノ内地区における事務所建築の構造と収益性、日本建築学会計画系論文報告集、日本建築学会、査読有、Vol.76、No658、2010、pp.2943-2951

光井渉、歴史的資産を活かしたまちづくり
その回顧と展望、地域政策研究、地方自治研究機構、査読無、2010、pp.6-12

〔学会発表〕(計2件)

光井渉、中世寺院建築における様式概念の生成、日本建築史研究会公開シンポジウム「中世建築における様式研究の再考」、2011

光井渉、日本の歴史的都市 - その類型と特徴 -、ボローニャ大学国際シンポジウム「日本とイタリアの歴史的都市 その保存と活用」、2011

〔図書〕(計3件)

光井渉、金竜山浅草寺、国指定名勝「伝法院庭園」内の歴史的建造物に関する調査研究報告書、2013、104

光井渉・太記祐一、井上書院、建築と都市の歴史、2013、412

光井渉、ぎょうせい、都市と寺社境内、2010、96

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

光井渉 (MITSUI, Wataru)

東京藝術大学・美術学部・准教授

研究者番号：40291819

(2) 研究分担者

無し。